

北京騷擾 その六

中島八十一

幸ひにして睡眠を妨げられることなく朝を迎へり。パニック居士の身の上より先に窓外の煙如何ならんと目を向けたるに、すでに収まりたらん。学会の予定はあれど余においてなすこと無し。その日一日の予定を思い浮かぶる由なく、のろのろと朝餉に向かふ。食堂の中に顔見知る者は何人も居ず、朝餉を共にすると申し合せたるにあらざれば異とするに足らず。

席に着き小姐を呼びたれば即座に来たれり。珈琲と申し付くるになしと言ふ。されば、何かはあると問へば茶ありとぞいらふる。すなはち茶を所望し、さらに食ふものを注文せむとするに、いづれもなし、定食の外は用意するを得ずと言ひたれば、定食にて可なりと言ふ外なし。短時間のうちに用意せられたるはトーストとウーロン茶ばかりなりき。バターとジャムの付きたるは良かりき。余に残されし楽しみは食ふことのみになりたれば昼餉や夕餉はいかがならむかと朝より気になりき。

自室に戻りたれば、水は出づ、湯沸かし茶を飲むこと可能なり。室内灯点き、エレベーター稼働したり。電話通じざるとテレビの同じ画面のみ延々と続くばかりなるを除けば通常のホテル生活なり。いづれがいづれの部屋に起居せりや知らざるはひとへに余の性格による。

学会の開かるる気配なければこの日午前中を自室にて無為に過ごせり。戸を叩くことばかりは御免蒙りたし。あれきりで済みたるは心休まれり。かくして昼餉なり。ことのほかにぎやかにて顔見知りたる者ほつりほつりと見えたり。一人用のテーブルに案内され、そのまま定食すなわち簡単な洋食と中国茶を食していづれとも語ることなく自室に戻れり。

寝台に転がり、短き昼寝の午後二時ごろのろのろと一階の玄関広間に向け降りき。そこには十人を超える学会に参加せる者屯したりき。学会とは縁のなき人、日本人ならぬ者少なからず。いづれもすることないねと他愛なきことを話せるほどにやや背の低きスーツ姿の若き男が外より入り来て鞆よりA版の紙

取り出して、壁に貼り出しほどなく外に出て行きたり。何ごとならむと見れば、日本語なり。「現今北京には多くの困難の生じたれば日本の方は気を付けて帰りましたまへ。在北京日本大使館」とある。いかにして気を付くべき、飛行機飛びてありや、と疑ひの声洩れたり。

ざわめき収まらざるその場に▶生命北京支社長なる人物登場し、他にも日本人グループいくつかありたるに学会グループに近づき「お困りなるらむ。㊦航空並びに㊧航空の支社長宅も知りたれば、飛行機の運航状況確かめに行かん。いづれか御一人一緒に参らん。我自家用車を持って」と言う（ふ）。同じグループの他の御仁、この申し出を如何に聞きたりや余は今日まで存せず。退屈したれば余は名乗り出で▶生命支社長の車に乗り込みたり。街中の道は広けれど車の一台も見えず。余「静かなるかな」支社長「かかることはかつてあらず。騒乱起りしによりて斯くなりけるか」。ここなるは日本人村なり。㊨航空支社長の家に行かむ」。㊢航空支社長の一軒家は留守にてチャイム鳴らすも応答なし。転じて㊣航空支社長の一軒家訪なへば、支社長のみただ一人をり。珈琲淹れてもてなしてくるは嬉しかりき。「いまだいづれの連絡もあらず」。「そもこの街、あきなひするを許されざれば、団体旅行のセールスマた論外なり」と問はず語りに支店長語れり。

何ら得るものなく、むな手にてホテルまで送らる。ホテルに着きてドアをくぐれば玄関まで他グループも含めて多くの人の立ち集ひたるにその中より一人余に向かひて来たれり。余は余の後ろにいづれか有名人ありやと、振り返りたり。向き直りたるに先頭の者余の片手を両手で包み込み「君、自らの危険を顧みることなく一同のために探索せしこと感謝この上なし」。余の行動は好奇心が勝される結果なり。それだけのことなり。

この折、いづれの音頭取りか記憶に残らざれど、この時、この場所に居る者の名簿作らんと提案あり。白紙に各人氏名、年齢、帰路の予約便を記入せり。㊤人分集まりたり。この名簿20年後に㊦葉の写真と共に予の荷物の中より見出せり。早速電子データに変換せり。写真のひとつは事件直前の天安門前広場の風景で自由の女神像と多くの中国人学生が写りをり。今ひとつは北京脱

出時の空港内の風景にて余の立姿も収まれり。いずれも撮りし人不明のまま
余年過ぎ去りし

夕餉の定食取り早々に就寝したり。考えへることさらになし。

(令和五年八月二十一日受附)